

令和 7 年度 白石高等学校蔵王キャンパス 学校視察報告書

視察校	福島県立猪苗代高等学校（全日制課程） 普通科（普通コース・ビジネスコース） ※ 学年 1 学級
視察日程	令和 7 年 1 1 月 1 4 日（金） 午後 1 時～午後 3 時 3 0 分
研修内容	<p>1 学校運営</p> <p>（1）校務分掌編制・学校運営協議会（コミュニティ・スクール）</p> <p>○学年 1 学級規模の独立校であり、教諭は 9 名配置されている。校務部は教務・生徒指導・進路指導の 3 部設置しているが、各部所管の業務を校内委員会や全体で取り組むものに仕分け、業務負担のバランスを保てるよう工夫している。また、学年主任は配置せず、学年担当教員が学年諸務を担当するなどして担任のサポートに当たっている。</p> <p>○総合的な探究の時間「猪苗代学」の指導を担当する特別非常勤講師（7 名）を任用し、地域に密着した学習活動を展開している。</p> <p>○各部活動には複数の顧問を充て、楽しむことをモットーに運営・指導に当たっている（スキー部に部活動指導員を配置）。生徒・教員ともに放課後の時間を有効に活用できる環境が整えられている。</p> <p>○令和 3 年度より学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を設置し、「郷土を愛する心を持たせ、地域の課題を解決する力の育成」を目標に地域の人的資源・物的資源を最大限に活用し、地域が抱える諸課題の解決や新たな可能性の創造に取り組む教育を推進している。学校運営ビジョンの策定に外部の意見を取り入れたことで、学校のニーズや地域の切実な課題を踏まえた学校運営の工夫・改善が進み、学校の活性化につながっている。</p> <p>（2）働き方改革の推進</p> <p>○長期休業期間の閉庁日設定や留守番電話の導入、一斉メール機能を活用した欠席連絡の他、毎週水曜日を「生徒一斉下校日」（定例職員会議等の実施）に定めたり、部活動を平日週 3 日の活動に限定したりするなどして、教員が働きやすい環境づくりに取り組んでいる（年次有給休暇の取得率向上・時間外在校等時間の減少）。</p> <p>2 教育課程の特色</p> <p>（1）教育課程・学習指導</p> <p>○令和 3 年度まで普通科と観光ビジネス科を設置していた経緯もあり、現行の教育課程（普通科）にはビジネスコース（2・3 学年）を設けている。</p> <p>○チームティーチングをしている教科は国語・体育・情報である。また、課外の時間を利用した個別支援を随時行っている。</p> <p>○授業支援ツールは Google Classroom を利用しており、総合的な探究の時間「猪苗代学」をはじめ、各教科で活用している。</p> <p>（2）総合的な探究の時間「猪苗代学」</p> <p>○各学年 2 単位（金曜日第 5・6 校時）設定し、特別非常勤講師の協力を得ながら全教員で指導に当たっている。</p>

○各学年における指導内容（概要）は下記のとおりである。

【１学年】「知る学び」を重視し、地域理解を深めながら、自己理解を深めることをテーマとし、「防災・観光・農業」の３分野のフィールドワークを組み込んだ学習を展開している。

【２学年】地域の専門的講師（特別非常勤講師）によるゼミ形式の課題解決学習を展開している。

【３学年】テーマ自由型の個人研究としている（グループ学習も可）。

○特別な運営組織はなく、主担当の教員が全体計画・各学年年間指導計画を立案し、学習指導を展開している。猪苗代町とのつながりは長く、様々な活動に協力していただいた外部人材も多いため、地域の人的・物的資源の活用に関する課題はない。

○在籍生徒の状況や学校運営ビジョンを踏まえた「総合的な探究の時間」の指導を通して育む資質・能力を明確にし、各学年の年間スケジュール（横）、学年段階（縦）を紡ぐ学習計画としている。指導に当たっては「生徒も大人（教員）も、失敗を失敗のまま放置せず、チャンスととらえるマインドをもつ」というスタンスをもち、内面の「気づき」に目を向けていくことを重視している。

○各活動の運営や学習指導に係る経費は、「三菱みらい財団」の助成金を充てている。助成金は、全国募集に係るPRパンフレットや「地域みらい留学フェス in 東京」の生徒引率旅費・宿泊費等にも活用した。

○空き教室を「探究ルーム」として活用し、生徒が作成した成果物（発表パネル・ポスター）や地域の観光パンフレット、民芸品などを掲示・設置し、生徒が課外の時間を活用して自主的に学習が進められるようにしている。また、「探究ルーム」は、校内における情報発信拠点の機能も担っている。

○例年１月に各学年の「猪苗代学」における学びを発表の場として「学習発表会」を実施している（猪苗代町体験交流館「学びいな」）。学年により発表形態を変えるなどしている（１学年：ポスターセッション、２・３学年：ステージ発表）。

３ 生徒の状況

（１） 生徒指導・教育相談等

○在籍生徒のほとんどが猪苗代町出身者である。全体的に穏やかな性格である。指導に当たっては「失敗を許容し、どうすればよいかをともに考える」寄り添った対応を心得ている教員が多い。

○カウンセリングの活用状況は年々減少傾向にある。日頃から職員室で生徒の様子や学校全体の状況、必要なサポートについて情報共有している。

（２） 生徒会活動（委員会活動）・部活動

○生徒会執行部やJRCインターアクト委員会は町や関係機関の要請に応じて積極的に地域の行事・イベントの運営等に参画している。また、近

隣の支援学校との交流、子ども食堂の運営補助などのボランティア活動に取り組んでいる。

○部活動は任意加入とし、週3日の活動としている。高体連主催の大会に参加しているのは、スキー部と臨時設置の陸上班（駅伝）である。総合スポーツ部、総合文化部は班を編制し、各種活動に取り組んでいる。高体連・高文連主催の大会等への参加を目的とせず、生徒が主体的に楽しんで取り組むことを重視している。

4 進路指導・キャリア教育

○例年の傾向として、就職・進学それぞれ半数ずつの志望状況である。近隣地域の企業の就職や東北地区の大学・短大等への進学が主である。

○就職者の中には、町職員として採用された者もいる。本年度の民間企業への就職希望者は、ほぼ全員内定をいただいている。

5 学校行事・特色ある取組等

○県外の劇団の協力を得て「コミュニケーションワークショップ（CWS）」を年3回実施（全校行事）し、全学年混成（縦割り）のグループ活動を通して、コミュニケーションスキルの向上と思考力・表現力の育成を図っている。

○防災訓練（年2回）の他、「防災合宿」を実施している（全校宿泊行事）。ワークショップ形式の活動を基本とし、全学年混成（縦割り）のグループ活動を行っている。自然の家職員を講師として、段ボールベッドの設営、ロープワーク、野外炊飯などのアクティビティを実施している。内容は防災訓練の想定災害等と関連付け、磐梯山の麓に位置する高校の生徒として防災に対する意識を高め、有事の際に活用できる生きた知識・技術を身に付けられるよう工夫している。

○自衛隊や自然の家職員による協力のもと「磐梯登山」を例年実施している。

○2年生の修学旅行期間（10月）中、1・3年生で「遠足」を実施している。

○本年度の「学びの収穫祭」（11月）では、県外の中学生も含めて400名を超える来場があった。本行事は「猪苗代学」の中間発表会として位置付け、当日は学習内容や成果物の発表等をしている。プレゼンテーションの他、来校者からの質問に答えるなどの経験を通してコミュニケーションスキルの向上が見られる。また、来場者アンケートの内容は、例年1月に実施している「学習発表会」に向けた発表準備に活用している。

○文化祭「若鷹祭」は、生徒数の減少や各種行事とのバランスを考慮し、一般公開を3年に1回の実施としている。それ以外は校内発表のみとし、クラス企画などを中心に生徒同士が楽しめる内容を実施している。「学びの収穫祭」などの他の学校行事と合わせたり、猪苗代町のイベントに参画したりするなどして形態を変更することを検討している。

	<p>○近隣にスキー場があるという土地の利を活かし、前年度より全校生徒を対象に「スノースポーツ教室」を実施している。１年生については、実習後に「猪苗代学」とのつながりを踏まえて、町の観光課の方による学習会を実施している。</p> <p>６ その他</p> <p>○「三菱みらい財団」の支援を受け、本年度の入学生から「地域みらい留学」全国募集を開始した。本年度は６・８月に東京で開催された「地域みらい留学フェス」に参加し、学校ブースで生徒が学校の特色や「猪苗代学」の取組等を紹介した。本フェスでのＰＲ活動を機に「体験入学」（７月）や「学びの収穫祭」（１１月）に県外中学生が多数参加した。</p>
<p>学校づくりに 役立てる 具体案</p>	<p>蔵王キャンパスは、令和８年度まで蔵王高等学校と合同で教育活動を実施し、同校が構築した「蔵王あすなろプロジェクト（ＺＡＰ）」を継承し、「蔵王タイム（総合的な探究の時間）」や特別活動等を要としたカリキュラム・マネジメントに取り組んでいる。この中でも特に蔵王町ジオパーク推進室の協力により実施しているジオ・ウォークラリーやジオ・フィールドワーク、ジオツアーの実践等（ジオツアー学習）の取組は、本キャンパスの総合的な探究の時間の主軸であり、生徒の地域社会に対する理解を深め、課題解決能力の育成に資するものである。一方、本キャンパスは学年１学級の小規模校であり、令和９年度には全校３学級となる。今後、教員数が減少していくことから、前記の取組等を持続可能なものとするための方策等を検討する必要がある。これらの実情や視察校における実践内容を踏まえて、今後の学校づくりに向けて下記の点に取り組んでいきたい。</p> <p>１ 主体的・対話的な学びの推進（自走できる生徒の育成）</p> <p>○「総合的な探究の時間（蔵王タイム）」や特別活動等における学習形態（縦割活動等）の工夫（学年間交流と学びの継承、コミュニケーションスキルの向上、支持的風土の醸成）</p> <p>○「総合的な探究の時間（蔵王タイム）」等における学習成果や資料等の展示・交流空間の整備（各種発表ポスター・プレゼンシートの掲示、自然標本・地域の工芸品・観光案内パンフレットの設置、自主学習スペース）</p> <p>２ 持続可能な教育活動の運営</p> <p>○各活動の工夫・改善と精選、運営・指導体制の不断の見直し</p> <p>○「地域パートナーシップ会議」の設置による関係機関等との緊密な連携体制の確立</p> <p>○校務分掌の再編統合、各種業務のスリム化（業務量の平準化） 等</p>